
とある日和の日常風景（ノーマルライフ）

検体番号10032

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある田和の日常風景
（マルライフ）

【Zコード】

Z5802R

【作者名】

検体番号1-0032

【あらすじ】

8月31日、アクセラレータとラストオーダーは軽くない傷を負つた。二人は入院し、治療を受けていたのだが、突然ラストオーダーが「お出かけしたい！」とわめきだす。

時間軸的には8巻と9巻の間です。ネタばれはたぶん無いと思いますが、それが嫌な方はご遠慮ください。

「あン？　お出かけだア？」

「そうなのそうなの、つてミサカはミサカははしゃいでみたり！」

時刻は9時。一般的な人ならば活動を開始しているであろうこの時間、アクセラレータとラストオーダーもまた活動を開始していた。

二人は現在、入院中である。8月31日の事件により入院した二人はもうほとんど回復し、普通に生活する分には支障ない程度になっていた。ただ、アクセラレータの脳は深刻なダメージで言語機能と演算能力に損傷を負ってしまった。^{〔ウンキヤンセラ〕}それでも『冥土^{〔ウノキヤ〕}帰し』の異名を持つ医者の力で、ミサカネットワークを利用するためのチヨーカーを作成してもらい代理演算を行うことで、まともに会話ができるまでにはなったのだが。

(このガキ……自分の立場が分かつてんのか?)

アクセラレータは心の内で呆れ、嘆息する。
ラストオーダーはクローン生成計画『妹達^{〔シスター〕}』の司令塔の役割を担っている。そのために外部の研究者などに狙われるのではないか、とアクセラレータは危惧しているのだ。

「いいじゃないか。行つてきなよ」

病室の入り口から、ふとそんな声が聞こえてきた。視線をそちらにやると、一人の恩人である『冥土^{〔ウノキヤ〕}帰し』が白衣姿で立っていた。

「やつたあ！ ついてミサカはミサカは両手を振り上げて溢れんばかりの喜びを表してみたり！」

ラストオーダーは思わず援軍に喜んでいるようだが、アクセラレータは渋い顔をしていた。

「テメエ、正氣か」

「僕は至って正氣だよ」

「『』のガキがどりいう存在か、知らねエ訳じやねエだろ」

アクセラレータは狂喜乱舞するラストオーダーを指差しながらその危険性を伝えようと『冥土帰し』に食つて掛かる。

しかし、当の『冥土帰し』は涼しい顔で会話に応じる。

「そうだね。妹達計画においてラストオーダーほど重要な個体はそう簡単には作れまいよ」

「それが分かつてんなら」

「でもね」

アクセラレータの言葉を区切り、『冥土返し』は告げる。

「君が守れば、何も問題は無いだろっ！」

アクセラレータはその言葉に、舌打ちで応えた。

とはいえる一人は未だ入院中の身なので、そうそう遠出はできない。
そこで『冥土帰し』が妥協案として提示したのは……

「まさかこんな所に水族館があるなんてね~、つてミサカはミサカ
は素直に驚きを表情で表現してみる」

水族館だった。

様々な所に最先端の技術を搭載している学園都市だが、水族館にはそこまでのハイテク化は見られない。もしかしたら魚たちの管理のために何かしているのかもしれないが、単純に鑑賞を目的としてきている客からすればどうでもいいことだ。

現在二人は入り口前にいた。入館に必要な手続きを終え、後は入るだけという状況だ。

その手続きの際、受付の男性がアクセラレータを見るだけで萎縮してしまっていたが、よくある事なのでアクセラレータは気にしなかつた。

「早速入ろう、つてミサカはミサカは抑えきれない自分の感情に素

直に従つてあなたの手を引っ張つてみる!」

ラストオーダーはアクセラレータの左手をつかみ、入り口の方へと進んでいく。自分よりも上背の高いアクセラレータを引っ張れているあたり、どれだけ楽しみなのかが伺えるだろう。

ただアクセラレータは、右手に握る杖を使わなければならぬため引っ張られては歩きづらいのだが。

「引っ張ンなクソガキ」

暴言を吐きながらもつかまれた手を振り払わないあたり、アクセラレータも本心から嫌がつてはいないうらしい。

「もう、素直じゃないんだから、つてミサカはミサカはミサカは達観したような笑みを浮かべてつんつんしてみたり!」

「…………チツ」

「な、なんでそんなに怒り顔なの? つて、ミサカはミサカはミサカはえずの笑顔を浮かべてみたり……」

「…………なんでもねエよ」

アクセラレータは、ラストオーダーの警戒心の無さに呆れる。自分の存在がどういうものか分からぬわけではないのだろう。『妹達』の司令塔という立ち位置にいるという自覚は少なからず持ち得ていると思う。

それでもおそらく、ラストオーダーの頭の中には一つの大きな事象が心の支えになつてているのだろう。

アクセラレータは“最強”なのだといふ、事象が

それでも、アクセラレータは不安が拭えない。

能力が無くなったり減衰したわけではないが、ミサカネットワークの代理演算を使用しなければならない点において全盛期よりは確実に弱くなっている。そんな自分に、ラストオーダーが守れるのか、と。

(いや、違うな……)

アクセラレータは、自分の手を引くラストオーダーを見ながら決意する。

「ほらほら、早く入るついでミサカはミサカは……」

「走ンな、水族館は逃げやしねよ」

守れるのか、ではない

「時間は消費されるの一つ！ つてミサカはミサカは限りある時間を使最大限使おうといつすばらしい意見にたどり着いてみたり！」

「……ただ遊びてエだけだろオが」

絶対に、守るのだ

「……やつてやる」

「え、何か言つた？ つてミサカはミサカは振り返つて聞き返してみる」

「何でもねエよ」

そうして二人は、水族館へと足を踏み入れる。

一方は期待、一方は決意を胸に秘めて。

「わあ！ ねえねえ見て見て、大きな魚！！ つてミサカはミサカは初めて見る海洋生物に驚きを露にしてみたり！！」

「あア？ ただのイルカじゃねエか」

「ミサカは初めて見るのー。つてミサカはミサカはイルカといひ生物から田を離れずに應えてみるーー。」

「……そんに楽しいかア？」

「未知との遭遇は、いつの時代も楽しいものだよー。つてミサカはミサカは生命の探求者としての意見を述べてみるー。」

「いつからテメエは生命の探求者になつたンだ」

「あ、あれは知ってるよ。サメでしょ、つてミサカはミサカは自分の持つてる知識をひけらかしてみる」

「誰でも知つてんだる、サメくらー」

「でも生で見るとやつぱつちこいね、つてミサカはミサカは感嘆の声を漏らしてみたり」

「そオかい」

「まさかアレがフカヒレになるなんて……ジユルリ」

「おい、生命の探求者としての意見はどうした」

「ここは小魚たちがいっぱいだね、つてミサカはミサカは壮大な光景に目を奪われてみる」

「確かに、こんだけ大量だと壮观だな」

「かわいいね～、つてミサカはミサカはガラスをつきながら田を細めてみたり」

「まあここにいた方が安全だろオナ。海にこんだけいたらすぐに大型生物の捕食の的になっちゃう」

「……アクセラレータ」

「あン？」

「食べないでね？ つてミサカはミサカは……」

「テメエはオレを何だと思つてやがンだアー！」

水族館での楽しい一幕はひとまず終了の時を迎へようとしていた。アクセラレータの危惧は徒労に終わり、何事も無かつた。アクセラレータからしても何も無いに越したことは無いので、ひとまず安堵した。

現在二人は帰路についている。水族館から病院まではあまり離れていないのだが、ラストオーダーが「お散歩したい！」と言い出したので付き合うことにしたのだ。元々は『冥土歸し』に迎えに来てもらう予定だったので、一報を入れて許可ももらつた。

夕暮れということもあり、石段で造られた小道はオレンジに染められ、一人の影を色濃く映し出している。そこから日に映る公園には、数人の子供が親の元へと駆け出していく様子が見て取れる。

「今日は楽しかった～、つてミサカはミサカはスキップしながらそいつぶやいてみたり」

アクセラレータと手をつなぎながら、ラストオーダーはそう言った。水族館にいる間、ラストオーダーのテンションが低下することは一度も無かつた。見るものすべてが初めてで、新鮮で、本当に楽しかったのだろう。

「そオかい、そりやよかつたな」

そんなラストオーダーに、アクセラレータはそつけない態度で返す。手をつないだ状態でスキップしているので、杖を使用しているアクセラレータからすればやめてほしいことなのだが、そんな事は口にも出さない。

「あ、ねえねえ！ 公園で少し休まない？ つてミサカはミサカはすぐその公園を指差しながら休憩を促してみたり」

「あア？ ンなことしなくても、もオすぐ病院につくだろオが」

「せつかくお外に出てるんだから、もうちょっとといいでしょ？ つ

てミサカはミサカは再度お願いしてみる…」

「……チツ」

舌打ちを肯定ととつたのか、ラストオーダーはアクセラレータの手を引いて公園へと足を踏み入れる。一人はまっすぐベンチへと向かい、隣り合つて座る。

夏も終わろうとする季節の今となつては、この時間帯の気候は過ごしやすかつた。心地よい風が吹き抜けていく。

「んつ……むう……」

奇妙な言葉を発するラストオーダーを見ると、舟を漕いでいた。水族館ではしゃぎにはしゃいでいた時の疲れが今になつてきたのだろう。身体的にも精神的にも幼いラストオーダーが強烈な睡魔に勝てるわけも無く、自然とアクセラレータにもたれかかって寝息を立てる。そんな無防備なラストオーダーの寝顔を見て、アクセラレータは嘆息する。

(無防備過ぎingだよ、クソガキ)

アクセラレータは、周囲への警戒を強める。ラストオーダーが寝てしまつた以上、襲われた際にラストオーダーだけを逃がすことは難しくなつた。

なので、どれだけ強大な敵が来ようとも自分の力だけで相対しなければならない。

そんな時だつた。

「へつへつへ……」

公園の奥から、気持ちの悪い笑みを浮かべた数人の学生らしき男が現れた。

皆一様にアクセラレータを見ており、ラストオーダーの事を見ていない。そして全員の手には、鉄パイプが握られている。

(スキルアウト、か)

アクセラレータは一番ありえそうな回答をはじき出す。
スキルアウトとは、超能力開発に失敗・挫折、もしくは超能力のレベルが停滞した者達で構成された集団の総称である。レベルが低くともそうならない人間も大勢いるため、スキルアウトのことを落ちこぼれと言う人もいる。

「アクセラレータ、だよなあ……？」

先頭に立つてゐるリーダー格であるつ男が口を開く。

「だつたらビオした。まさかオレとやつ合オうつてんじゃねエだろ
オな？」

「へつへつへ、その通りさ

その男は、即座に肯定する。

「知つてんだぜ？ 今のテメエは、満足に能力を使えないんだろ」「そんな状態のテメエなら、俺たちで一斉にかかれば余裕で勝てるんだよ」

「そうすれば……俺たちが最強なんだからなあー」

「……」

アクセラレータは何も言わず立ち上がり、ラストオーダーをベンチに寝かせる。

「何だそいつは、テメエのガキか？」

「おいおい、いつから『学園都市最強』はベビーシッターになつたんだよ」

「…………ハハハハハハハハハハハハハハ！」

耳障りな笑い声も、アクセラレータの耳には入つてこなかつた。ただ静かに、首元のチョーカーへと手を伸ばす。

「おい、何か言つたらどうなんだよアクセラレータ。ジビツてんの

かあ？

「……」

「スカした態度とりやがつて……ウゼュんだよーー！」

いつまでも沈黙を保つアクセラレータに痺れを切らし、数人で同時に殴りかかった。

取り囲み、一斉に振り下ろされた鉄パイプは鈍い音と共に、アクセラレーターの頭蓋を破壊した。

ズガガガガガツ！！

筈だつた。

「三下が……粹がつてンじやねエぞ」

アクセラレータに振り下ろされた鉄パイプは、一本残らずへし折れていた。

アクセラレータは何もしていない。しいて言つなら、首もとのチヨーカーをいじつただけだ。

アクセラレータのチョーカーは、ミサカネットワークの代理演算を“通常モード”から“能力使用モード”へと移行させる役割を持つ。時間制限こそあるものの、発動中は能力を思う存分使用できる。それにより現在のアクセラレータは、紛れも無く『学園都市最強』としてそこに立っていた。

「なつ……はあ！？」

「どうこいつことだよ！ 話が違つじやねえかー！」

「アクセラレータは弱くなんたんじゃー？」

男たちは慌てふためく。無理もないだろう。自分たちが挑んでいる相手は『学園都市最強』、能力が満足に使えないという情報があつたからこそ相手にしたというのに、アクセラレータは能力を使用している。

圧倒的優勢だと思っていた状況から一気に劣勢に叩き落され、男たちの精神は限界だつた。

「確かに俺は、弱くなつたかも知れねエ」

大勢の男たちに囲まれた状況で、アクセラレータは俯きつぶやく。

「でもよオ……違つだろ」

「な、何がだよーー」

リーダー格の男は、精一杯の虚勢を張つてアクセラレータに噛み付く。

「何がつて、そりやアお前……」

言葉を一度区切ったアクセラレータは再び顔を上げた。その顔に張り付いていたのは、狂気にもみれた笑顔。

「ンな事で、圧倒的実力差が埋まつたとでも思つてンのかつて事だよ」

言い終えると同時に、男たちは粉塵に包まれた。

「……あア、そうだ」

「…………ん……」

「場所？その辺の公園に適当に転がってンだろ」

「……んこゆ、むう？」

「……ガキが起きた、後でな」

そう言つてアクセラレータは携帯電話の通話をやめる。

「誰にかけてたの？ つてミサカはミサカは眠氣眼をこすりながらたずねてみる」

「さアな。つてか起きたンなら自分で歩けクソガキ」

「えへ、疲れた～、つてミサカはミサカは背中にしがみつきながら駄々をこねてみる！」

「チツ」

現在、アクセラレータは右手で杖を突き、ラストオーダーを左手で背負つている。

男たちを軽く蹴散らした後、眠つたままのラストオーダーを背負い再び帰路についた。その状態で『冥土帰し』に連絡を入れ、男たちの回収を依頼したのだ。

「今日は楽しかったね！ つてミサカはミサカは今日一日を振り返つてみたり！」

「俺は現在進行形で疲れてンだがな」

「だったら癒してあげる！ つてミサカはミサカは可愛さを前面に出しながらあなたの背中にへばりついてみたり！」

「ンな事する前に自分で歩け」

そんなやり取りをしていると、前方に病院が見えてきた。すれ違のように救急車が走り去つていったので、おもろく本当に回収しに行つたのだろ？。

「やつと着いたか」

そう言つてアクセラレーターはラストオーダーを降ろす。ラストオーダーもそれに素直に従い、病院の入り口へとかけていく。その途中でふと、立ち止まる。

「どオした？」

何事かとアクセラレーターが話しかけると、ラストオーダーは振り返つた。

その顔には、満面の笑みが。

「アクセラレーター！」

向かい合つた状態でラストオーダーは名前を呼んだ。

「あン？」

行動の意味が分からず、アクセラレータは疑問符を浮かべる。それにもかまわずラストオーダーは続ける。

「今日は本当に楽しかったよー。ありがとー。」

「……あア。」

「えっと、だからね……」

そこでラストオーダーは言ひよどむ。心なしかモジモジしているようだ。

やがて決心したのか、顔を上げてこちらを見る。その頬はピンク色に染まっている。

「また、一緒に行こうねー。」

「……そオだな。」

ラストオーダーの笑顔を見て、再びアクセラレータは決意を固める。

「約束だよー。」

「あア」

守るために、なんでもする

「絶対に絶対だよー」

「しつけニギヤ」

「いたつ！ なんで叩くの！？ つて!!サカは!!サカは抗議してみ
たり！」

「うぬせH」

悪党として、何が何でも守り抜く

この、 暖かな光だけは

(ラストオーダー)

「頭が痛い……おんぶ……」

「うわせH」

少年は決意を胸に、悪の道を極めることを決める。
その道がいかに険しく、いかに厳しいかを知りながら。
それでも少年は、進み続ける。

すると、決めたから。

(後書き)

いつも、検体番号10032です。

この度は「」一読いただき、ありがとうございます。

今回は一次創作の短編を書いてみました。いかがでしたでしょうか?
「ある魔術の禁書目録」は原作・アニメ共に好きで、お勧めです。
未読の方は、是非「」一読ください。

感想・「」意見共にお待ちしております。メッセージでもかまいません。
よろしくお願いします。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802r/>

とある日和の日常風景（ノーマルライフ）

2011年10月7日03時44分発行